

## <卒業論文小特集>補文標識「こと」「の」の分析と その問題点

著者	星野 起美
雑誌名	日本文学誌要
巻	31
ページ	76-94
発行年	1984-12-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019418">http://hdl.handle.net/10114/00019418</a>

# 補文標識「こと」「の」の分析とその問題点

星 野 起 美

## ○ はじめに

ある文中で名詞句が動詞とどのような関係を持つか、あるいは、文中でどのような役割を持つか、ということを考える。それは語順でも示されるが、日本語では格助詞が大きな働きをしている。

(○・一) 家族の友達が花を買う。

(○・二) 家族が友達の花を買う。

しかし、文脈によってはしばしば省略され得る。

(○・三) 「私、花、買う。」

(○・四) 「私、花、買うの、楽しい。」

ここで次の例文(○・五)を観察してみよう。

(○・五) 私は花を買うが楽しい。

現在正しいとされている日本語では「花を買う」と「が」の間に「こと」「の」があるべきところである。

ここでは、補文標識と呼ばれるこれら「こと」「の」について変

形生成文法の立場から、分析、検討を行う。

第一章では、「こと」「の」はどのように生成されるか、として、それらが深層構造に存在するか否かを検討する。ここでは、例えば「花が友達と家族を買う」がおかしいのは「買う」という動詞がその主語として〔+Human〕の名詞を予想するからだ、<sup>(1)</sup>というような選択制限をとりあげて、検討を試みる。

第二章は「こと」「の」の句構造標識を考える。

第三章は「こと」「の」の違いについて考察を試みる。

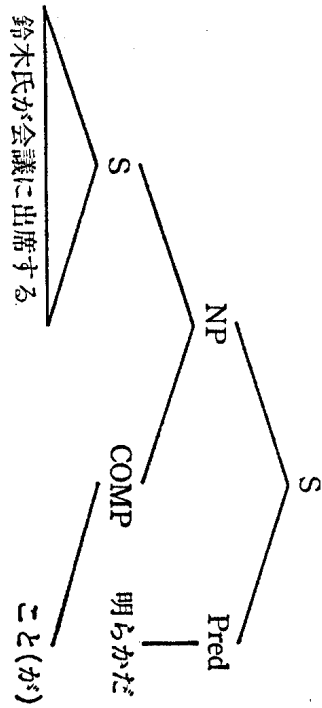
これらの考察を通して、変形生成文法の問題となっている、統語部門と意味部門の関係を観察したい。

一 「こと」「の」はどのように生成されるか——変形  
で挿入されるのか、深層構造に存在するのか。

変形生成文法では、日常我々が使っている文の構造を表層構造とし、基盤である抽象的な構造——深層構造から変形によって派生され

と考えている。変形は深層構造からその句構造標識を次々に他の句構造標識に写像していくものであるから、全く新しい句構造標識をつけ加えることはできない。<sup>(2)</sup>例えば、すでに与えられた句構造標識の一部を他の位置に付加し、もとのものを削除するような変形が考えられるのであって、深層構造にはなかった句構造標識を持ちこむような変形というのは、本来許されない。この立場において「こと」「の」の生成を考えるならば、それは深層構造に存在しているということになる。(1・1)は深層構造に存在しているとするとする分析である。

(1・1)<sup>(3)</sup> 鈴木氏が会議に出席することが明らかだ。

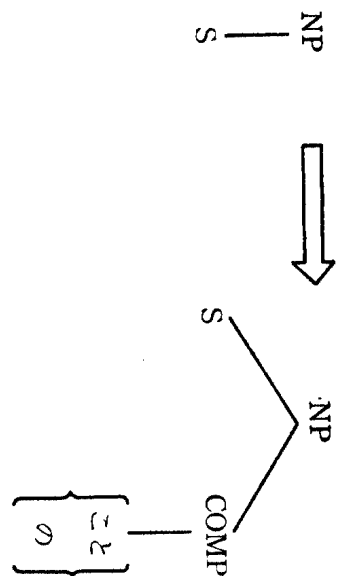


「こと」を補文標識 (COMP) として、名詞句 NP を補文である S と枝分かれさせる句構造規則を考えている。

(1・11) NP → S COMP

これに対し、COMP という節点およびそれに支配される標識が深層構造には存在しないという考え方があられる。それは (1・三) のような変形規則によって導入される。

(1・三)



この変形規則を提案している Shibatani (1978) では、補文標識が表層化の過程で挿入されるべきである論拠として次の点をあげている。「こと」「の」は、「本」「ネコ」といった普通の名詞と異なり、それ自体の語彙的意味を持っていない。また、一方では文を名詞化し他方では補文の始まりや終わりを示すという補文標識の機能は、意味的なものよりも統語的なものである。

しかし、Shibatani はこの規則がそのままでは不完全なものである、と自ら指摘している。この規則では「こと」「の」のどちらを選択してもよいことになっているが、実際には完全に交替可能ではない。補文が「感覚の対象となり得るような具体的事柄を表わす場合」には「の」、「抽象的概念を表わす場合」には「こと」が選ばれ、と観察している。だが、Shibatani が分析しがたいとしてあげている次の例文 (1・六) のように、補文が非常に抽象的概念を表わしているにもかかわらず、「の」を伴っているという場合がある。ゆえに、補文の事柄の抽象度のみで選択することはできない。

(1・六) 荒若は「自分が……亡霊かなにかであり……無そのもの」のごときであり、結果、ある冬の日暮、雪を踏んで歩

いている自分がその実在がまったく無意味でゼロである」のを感じた。

さらに、Shibatani は、「の」を伴った補文を含む主文の動詞には「見る」「聞く」を中心とした感覚動詞が多い、とも観察している。もし、「こと」「の」が主文の動詞の、例えば「感覚をあらわす」という述語の意味素性によって選択、決定されるとすると、「こと」「の」にそれぞれ選択関係のある述語の意味素性を、選択素性として表記することになる。選択素性によって表わされる語彙項目間の共起制限（選択制限）は、統語部門で扱うか、意味部門で扱うか、明らかではないにしても、変形で「こと」「の」が挿入されるとする立場では、深層構造において選択制限をかけることができない。

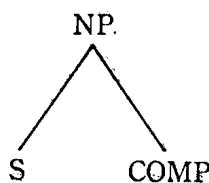
あるいは、どの補文標識が選ばれるかは主節の述語によって決定されると考えて、主節の述語にその指定がつけられているとすれば、変形で付加することを支持できそうである。だが、それでは、それぞれの述語の個別的特性として扱っていることになるので、述語の意味上の一般性から補文標識の選択の可能性を説明することが試みられてきては、いる。<sup>(4)</sup>例えば、命令、要求、提案、願望を表わす述語は「こと」を取り、知覚動詞は「の」を取る、というように補文標識によって動詞を分類するのである。<sup>(5)</sup>（その場合、「こと」「の」両方と共起できる述語もひとつの種類と考える。）

結局、補文標識は述語の下位範疇化（Subcategorization）に関与せずにはいられない。ということは、深層構造から生成しなければならぬ。また、Shibatani の、補文標識が普通の名詞と異なるか

ら、という論拠を次章で検討することになるが、そこにおいて、さらに、補文標識を深層構造で認めることになるだろう。

## 二 「こと」「の」に関する句構造標識について

深層構造で「こと」「の」が生成されるにしても、されないにしても、第一章において眺めた、補文標識を含む句構造標識はいずれも同じ形であった。NP が S と COMP を支配するという句構造標識である。



本章では、この句構造標識が妥当なものであるかどうか検討する。

その一．S という節点について

Shibatani(1978) では、補文を独立文と同じように「文」(S) という節点の下に埋め込むことの妥当性を大体、次のように説明している。

(S—①) 独立文が「た」「る」という要素によって、過去、非過去の時制を示すように、補文もこれらの要素をとることができる。

(S—②) 独立文が受動規則の適用によって受動文となり得るように、補文も受動文になることができる。

(S—③) 補文に含まれている要素が独立文に含まれている要素と統語的に同じような働きをする。(例：主語の働き→再帰代名詞

化、尊敬語化。主語以外の名詞の働き↓謙讓語規則)

「文」(S)として埋め込むことの説明には問題はないと思われるが、独立文と同じかどうかという点では、問題がある。

(二・一) これから映画館へ行く。

(二・二)\*これから映画館へ行くこと  
〔こと〕を提案してみる。

(二・三) 彼は今春結婚するそう。

(二・四)\*彼は今春結婚するそうだ  
〔こと〕をいいふらしてしま

った。

しかし、次の(二・五)が文であることも確かであるし、(二・六)は(二・五)とまったく同じ文を補文としてとり得る。

(二・五) これから映画館へ行く。

(二・六) これから映画館へ行くことを提案してみる。

この問題は、その三、COMP という節点について、の中で検討することにし、次に NP という節点について考える。

その二・NP という節点について

まず、Shibatani (1978) の、補文(S)を名詞句(NP)として主文に埋め込む統語的根拠を要約すると、

(NP-①) 普通の名詞句と同じように「が」「を」「に」といった格助詞をとりうる。

(NP-②) 普通の名詞句と同じように、主語とか直接目的語とかいった統語的役割を果たす。(例：名詞句が直接目的語として働くものは、その文の動詞が適当なものであれば、受動規則の適用を受けて受動文の主語となることができる)

と、いうことになる。

(NP-①) に対しては異論はないが、(NP-②) は検討する必要がある。次は Shibatani の説ではうまくいかない例である。

(二・七) 次郎は花子が自殺するのをくいとめた。

(二・八)\*花子が自殺するのは次郎にくいとめられた。

これに対して、次の例文で受動化変形の標的は、明らかに名詞句(NP)である。(二・九)を基底構造として(二・十)が派生されたと考えられる。

(二・九) 次郎は花子の自殺をくいとめた。

(二・十) 花子の自殺は次郎にくいとめられた。

受動化を適用するとうまくいかない例をもう少しあげる。

(二・十一) 学生はレポートを書くのを望んだ。

(二・十二)\*レポートを書くのは学生に望まれた。

これも同様に、普通の名詞句であれば、完全によい文 (asterisk[\*] がつかない) である。

(二・十三) 学生はレポート形式を望んだ。

(二・十四) レポート形式は学生に望まれた。

これらの例を観察して気がつくことは、「の」ではなく「こと」であったら、受動化規則を適用しても悪い文 (非文法的な文) (asterisk[\*] のつく文) は生成されないということである。また、(二・八) や (二・十二) を次のようにすると、許容される文となることに気づく。

(二・十五) ジョンによって、花子が自殺するのはくいとめられた。

(二・十六) (学生によって) レポートを書くのは望まれた。

つまり、「の」のついた補文と述語動詞の間に他の語がはいるこ

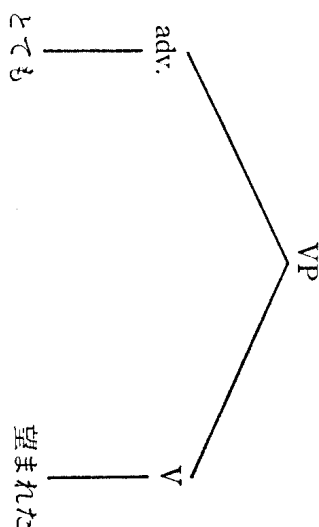
とが許されないようなのである。しかし、次のような例もある。

(二・十七) 花子が自殺するのはうまくいとめられた。

(二・十八) レポートを書くのはとても望まれた。

この現象を説明するのに、副詞を述語句に支配させるということが考えられる。

(二・十九)



そうすれば、「の」のついた補文と述語動詞 (VP) の間に他の範疇 (category) を持つ語は入ることができない、という統一性を持つ。しかし、それをどのように句構造標識に反映させるかが問題である。

そもそも、「の」のついた補文を NP とすることに問題はないのだろうか。「の」のついた補文は、名詞句 (普通の) ほど、あるいは「こと」のついた補文ほど、自由に述語動詞から離れて移動することはできないのではないか。その一例が受動化の例であり、ほかに分裂文変形の例がある。分裂文は、名詞句を一つ取り出して「だ」の前に置き、文の残りの部分の後ろに「のは」をつける、とされているが、「こと」のついた (二・二〇) から (二・二二) の生成は許されているのに対し、「の」のついた (二・二二) から

(二・二三) は許されていない。

(二・二〇) ジョンが恋人にふられたことを知った。

(二・二二) ジョンが知ったのは、恋人にふられたことだった。

(二・二二) ジョンが恋人に会えたのを喜んだ。

(二・二三)\*ジョンが喜んだのは、恋人に会えたのだ。

格助詞「が」「を」「に」は名詞句に付加するという点で、「の」のついた補文も NP と考えるほかはないようであるが、「の」のついた補文である NP は簡単に述語から離れないようにしなければならぬ。しかし、その方法としては、条件として記すほかに妥当な案はない。

その三・COMP という節点について

「こと」「の」を補文標識 COMP として NP の下に埋め込むことに関して Shibatani (1978) が述べていたのは、第一章にも書いた通り、「こと」「の」はそれ自体の語彙的意味を持っていない、ということ、文中の埋め込まれた文の終わりを示す機能が統語的なものである、ということだった。これに対し、いくつかの点から私には、「こと」「の」を補文標識 COMP ではなく、名詞 N とする考えをとる方がよいことを述べる。

その第一点は、補文 S を支配する名詞句 NP の内部でうちたてられる論拠である。Okutsu (1974) の、連体修飾構造の分析によると、『名詞のひとつの機能は、たしかに格助詞を介して用言に連なり、連用修飾に参加することであるが、それはあくまでも格助詞を介してであって、用言と直接的な関係を持つものではない。むしろ最も端的な直接的な関係は、連体修飾文を受けて名詞句を作ること

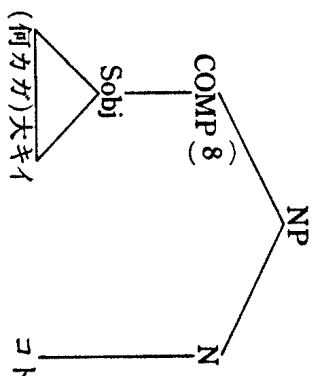
ある。<sup>(7)</sup>』

と、されていて、名詞であるか、ないかの判定を、連体修飾を受けるか、受けないかにゆだねている。そして、その結果、連体修飾構造をなす「こと」「の」は名詞であるというわけである。Okutsuによると、連体修飾構造には同一名詞連体修飾と付加名詞連体修飾があり、前者は被修飾名詞たる NP が必ず同一のものを連体修飾文中に持っているが、後者は連体修飾文中にはない名詞を外から付加して名詞句を形成するものである。さらに、付加名詞連体修飾には、<sup>(8)</sup>「マエ」「ウシロ」などの相対名詞が付加されるものと、連体修飾文とその名詞との間に「トイウ」が挿入できる「コト」「サマ」などの同格連体名詞が付加されるもの、の二種があると分析している。例文によって見ることにしよう。

(二・二四)<sup>(9)</sup> 大キイコトハ イイコトダ

この二つの「コト」の違いは次のように説明される。

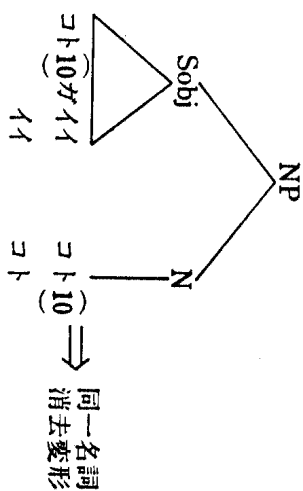
(二・二五) 付加連体修飾構造



(二・二五) は、連体修飾文外から「コト」が付加されている。連体修飾文全体の表わす事柄と「コト」が同一であるという同格連体

名詞であり、その証拠として「(何カガ)大キイトイウコト」というように「トイウ」の挿入ができる。

(二・二六) 同一名詞連体修飾構造



(二・二六) は名詞同一の条件によって連体修飾文の中にあつた「コト」が文末にあって被修飾名詞となつたものである。

「トイウ」が挿入できるか否かで、同格連体名詞であるか否かを弁別することができる、というのは次のような例文が示している。<sup>(11)</sup>

(二・二七) 一・相対名詞連体修飾

a 父は朝、食事するまゝに散歩する。

b \* 父は朝、食事するトイウまゝに散歩する。

(二・二七) 二・同格名詞連体修飾

a 麻雀がおもしろいことは知っている。

b 麻雀がおもしろいトイウことは知っている。

(二・二七) 三・同一名詞連体修飾

a 今日はおもしろいことをして遊ぼう。

b \* 今日はおもしろいトイウことをして遊ぼう。

同一名詞連体修飾の「コト」は、「コト」以外の名詞句が同一名

詞連体修飾されているのと同じように考えられても、何ら不都合な点はない。

(二・二八)<sup>(12)</sup> ぼくがきのう銀座で食べたウナギ

(二・二九)\* ぼくがきのう銀座で食べた映画

(二・三〇)\* ぼくがきのう銀座で映画を食べた。

(二・二九) が非文なのは、連体修飾文中に同一の名詞があって、その連体修飾文中で、選択制限がかかっていると考えられるからである。「コト」も同様である。

(二・三一)<sup>(13)</sup> コトは珍しい——珍しいコト(を知っている)。

(二・三二)<sup>(14)</sup> \* (その) コトが歩く——\* 歩くコト

「歩くこと」は同格連体名詞修飾としてなら、「(人が) 歩くこと」という意味で認められるが「コトが歩く」という意味のものは、連体修飾文中で選択制限にかかって、同一名詞連体修飾構造にはならない。

Okutsu (1974) の分析は第二章その一・S という節点について、で保留にしておいた、独立文と埋め込み文の違いの問題をも処理する。Okutsu のたてたベース・ルールの一部を次に示す。それはチョムスキーの標準理論よりもフィルモアの格文法的な形に近いといえるものである。

B1. S → S<sub>neut</sub> Style

B2. S<sub>neut</sub> → (Initial X S<sub>obj</sub>(Final))

まず、B1 の文(S) は中立文(S<sub>neut</sub>)と文体素(Style)には分析される。尊敬体、謙讓体、女性体などの待遇表現のためにたてられた文体素を、文から分出すれば、文体的には中立的な中立文が残

るといものである。中立文は文の実質的な意味内容を表現することになる。B2 の記号 X は、どちらでもよいがどちらかひとつはとらなければならぬことを意味し、この場合、中立文(S<sub>neut</sub>)は、感動詞などの文頭詞(Initial)だけでも、叙述文(S<sub>obj</sub>)だけでも成立する。(文末詞(Final)は任意の要素だが、必ず叙述文(S<sub>obj</sub>)を要求する)。中立文がこのように分析された重要な理由は、連体修飾構造において、連体修飾文となり得る部分となり得ない部分とを明らかにしなければならないからである。つまり、中立文から文頭詞と文末詞を除いた残りの部分である叙述文が連体修飾文となり得るのである。

(二・三三)<sup>(15)</sup> \* ウン、もう就職した兄貴

(二・三四)<sup>(16)</sup> \* 全然あてにならないサあいつ

(二・三三) (二・三四) は、文頭詞、文末詞を除けば、どちらも完全な連体修飾構造となり得る。文末詞は終助詞にほぼ相当するものだが、この基準から見ると、従来、終助詞とはされなかった意志を表わす「ウ・ヨウ」、伝聞の「ソウダ」などは終助詞的な機能を持ち、文末詞に入れるべきものであることがわかる。以上、Okutsu (1974) の分析によって「こと」「の」を N として埋め込む論拠の第一点を終わる。

第二の論拠は、X (エックスバー) 理論からの検討である。X 理論は Chomsky (1970) が、句という構成素の内部構造のパラリズムに注目し、異なる範疇間のそれをバーの数(またはプライム Prime ['] の数)によって表わすこと、統語範疇を素性の束で表わすこと、を規定したものである。この Chomsky (1970) の規定



には Jackendoff が修正案を出している。Jackendoff (1977) によれば、Chomsky の考える  $S \rightarrow N' V'$  という句構造規則は、Chomsky 自身がパラレリズムを示すために、主張した階層を表わす統語範疇の規定  $X_{n-1} \rightarrow \dots X_{n-1}$  に統一性を持たせないではないか、と指摘している。Chomsky の  $S \rightarrow N' V'$  という異なる範疇の混在した句構造規則に対し (Jackendoff はこれを Chomsky's mixed-level theory と呼ぶ)、Jackendoff は  $S$  を  $V'$  と考え、その句構造規則を  $V' \rightarrow N' V'$  とする (uniform-level theory)。

この Jackendoff の uniform-level theory の精神で補文標識 COMP の扱ふを考えるならば、 $NP \rightarrow S \text{ COMP}$  という句構造規則は、 $N' \rightarrow V' \text{ COMP}$  としたところで許されない。 $N'$  は  $N$  を支配しなければ、階層性が保たれない。普遍文法に、より迫ろうとする X 理論上でのパラレリズムの問題からいっても、「こと」「の」は補文標識 COMP という統語範疇でとらえるよりも、名詞  $N$  という統語範疇でとらえる方がよい、というのが、第二の論拠である。

第三の論拠は、「こと」「の」を持つ補文とそれを支配する主文との関係で選択制限が認められる、ということであてられるものである。

Inoue (1976) は「の」「こと」を、「事実」と同じように、同格名詞句の主名詞とは考えず、補文標識として区別するべきであるとしている。<sup>(17)</sup> その理由は、「の」「こと」は各種の補文に用いられるのに、「事実」の分布は非常に限られ、特殊な補文にしかつか

いからだという。次の例文は Inoue があげたものである。

(二・三五) ジョンはビルが自分を嫌っている【の】【こと】  
 「事実」がよくわかった。

(二・三六) ジョンはビルが助けてくれる【の】【こと】  
 「事実」を信じた。

(二・三七) ジョンはビルを説得する【の】【こと】  
 「事実」に成功した。

(二・三八) ジョンはビルが成功する【の】【こと】  
 「事実」を望んでいる。

(二・三九) ジョンはビルに手紙を投函する【の】【こと】  
 「事実」をたのんだ。

(二・四〇) ビルを説得する【の】【こと】  
 「事実」はやさしい。

(二・四一) ジョンは俳優になる【こと】  
 「事実」ができる。<sup>(18)</sup>

Inoue の説明では、非叙述述語、含意述語、期待・命令(または依頼)・判断を表わす述語、「できる」「ありうる」などの述語は「事実」をとらない、となっている。つまり、主文の述語が「事実」に選択制限をしているということになる。

Inoue のあげた(二・三五)～(二・四一)の例は、いかにも「の」「こと」が「事実」と違って、選択制限がかからないような分布を示しているが、(二・四一)にもその性質をのぞかせているように、「の」も述語の選択制限を受けている。Inoue も「の」「こと」の区別において、それを認めていて、それゆえ変形によって補文標識を付加するやり方は取れず、深層構造に補文標識 COMP を生成する方法を取っている。「の」「こと」の区別を補文標識に

固有の意味があるためと考えているのである。そうだとすると、補文標識 COMP という範疇をわざわざ設定する必要はないのではないか。意味のない形式的語と考えるからこそ、選択制限を受ける名詞 N とは別の違う範疇、補文標識 COMP が必要になってくるのであるから。

また、同じ同格名詞句の名詞となる「歴史」よりも、「事実」はその分布が各種の補文にわたるが、だからといって「事実」に特殊な統語範疇を与えるわけではない。

(二・四二) 母が旅行に行っていない【事実】[\*歴史]は変わらない。

(二・四三) 妹と口げんかした【事実】[\*歴史]はよく知られている。

(二・四四) 彼女が君を裏切った【事実】[\*歴史]を伝えておく。

(二・四五) あなたは自分が魅力あふれる女性である【事実】[\*歴史]を認めるべきです。

(二・四六) ジョンは自分が白状しなかった【事実】[\*歴史]を後悔している。

(二・四七) ジョンが白状しなかった【事実】[\*歴史]は有名だ。

「こと」「の」と「事実」、そして「歴史」と「事実」の区別は分布程度の違いによるものでそこには弁別の特徴はない、といっている。だから、次章で検討する「こと」と「の」の違いについても、抽象的、具体的という意味の違いは感じられても、「歴史」と「事実」のそれが不可能なように、弁別の特徴としては示すことができないのである。

以上で、「こと」「の」に名詞 N の統語範疇を与える三つの論拠の説明を終わる。

### III 「こと」と「の」の違いについて

第二章で、同格名詞句の主名詞「事実」が選択制限を受けていることから、「こと」「の」の選択を、主文の述語の意味素性によって行なう可能性を示唆した。例えば知覚動詞は「の」を取り、命令、要求、提案、願望を表わす述語は「こと」を取るというようにすることが考えられるが、それはうまくいかない。次の(三・一)～(三・十二)の例も示している。また、この問題は「こと」「の」に限らず、(二・四二) (二・四三) (二・四四) (二・四七) にも見られるように、「歴史」という主名詞についてもいえることである。主文の述語のためにそれが選ばれないわけではない。なぜなら(二・四二)と同じ動詞を主文に持った「男性が政界の鍵を握ってきた歴史は変わらない」の文は補文の内容が違うだけで、許容できる文になっているからである。ある主文の述語のもとで、ある同格名詞句の主名詞となり得るか、なり得ないかは、補文の内容によって左右されるのである。

(三・一) 父は息子が本を読んでいる【\*こと】をじっと見ていた。

(三・二) 妹は母がおせち料理を作る【\*こと】を手伝った。

(三・三) ケーキをつくる【\*こと】にクリームが要る。

(三・四) ビンが倒れている【\*こと】を起こした。

(三・五) 私はヨーロッパに行った<sup>\*</sup>の<sup>\*</sup>がない。

(三・六) 彼女はついに見合結婚する<sup>\*</sup>の<sup>\*</sup>を決めた。

(三・七) 彼は彼女にメッセージを渡す<sup>\*</sup>の<sup>\*</sup>ができなかった。

(三・八) 人々は彼に弁明する<sup>\*</sup>の<sup>\*</sup>を要求した。

(三・九) 友達から手紙が<sup>\*</sup>の<sup>\*</sup>を忘れていた。

(三・十) 彼は彼女に愛を告白する<sup>\*</sup>の<sup>\*</sup>をあきらめた。

(三・十一) 他人を批判する<sup>\*</sup>の<sup>\*</sup>はやさしい。

(三・十二) 彼は親がきびしくなかった<sup>\*</sup>の<sup>\*</sup>をうらんだ。

ところで、ここで新しい問題提起がある。(三・一)～(三・十二)の例文は一見いずれも同格名詞句の主名詞としての「こと」「の」、いわゆる、Okusu の付加名詞連体修飾構造のように思える。しかし、「トイウ」の挿入が拒まれるので、そうではない。すると、果たして同一名詞連体修飾構造であろうか。

前にも述べたように、同一名詞連体修飾構造であれば、その連体修飾文中に被修飾名詞と同一の、この場合は「の」を置き得るはずである。例えば(三・十三)のようにである。

(三・十三) a. 私が買ったのが一番いい。

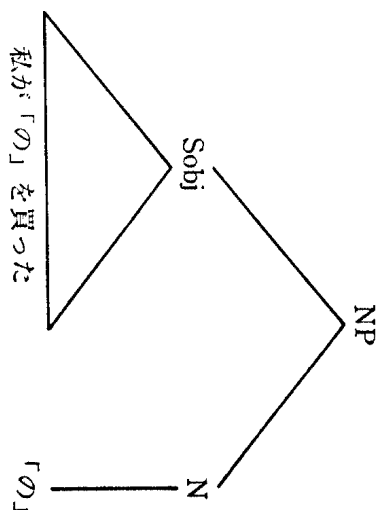
b. 私が「の」を買った→私が買った「の」

しかし、(三・一)～(三・四)では、連体修飾文中に「の」が占

めるべき場所がないようなのである。直観的には「の」は(三・一)では「息子」、(三・二)では「母」、(三・三)では「ケーキ」、(三・四)では「ビン」を意味しているように感じる。それは、主文の述語の性質が具体物を要求している、ということからくるものである。抽象概念を見たり、手伝ったり、起こしたり、あるいはそれに具体物が要りようになったりすることは、ありえないからである。そこで、これらの「の」を直観どおりであるとして、検討してみよう。

(三・十三) a の同一名詞連体修飾構造は(三・十四)のような構造をしていると考えられる。

(三・十四)

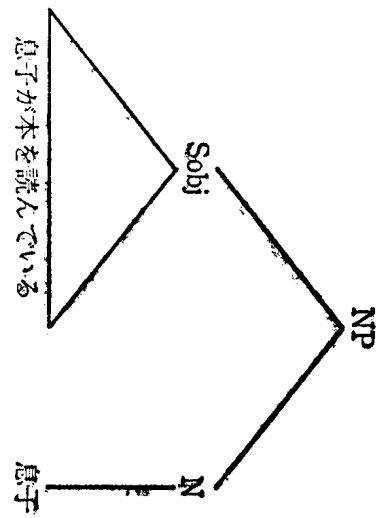


これに同一名詞消去変形がかかり、(三・十五)となる。

(三・十五) [(私が買った)の]

(三・一)の例で、今、仮に「の」が「息子」を意味していることから、「の」のかわりに「息子」を置く。

(三・十六)



(三・十六) の形ならば、(三・十七) のように派生される。

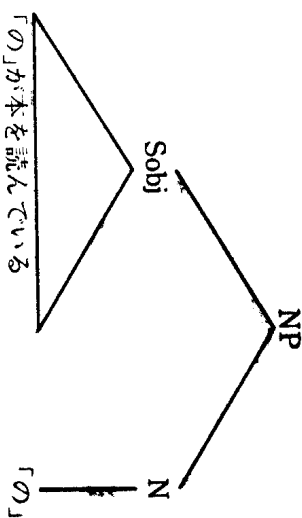
(三・十七) 「の」本を読んでいる」息子」

(三・一) と次の (三・十八) ではどうかであろうか。

(三・十八) 父は本を読んでいる息子をじっと見ていた。

「の」が「息子」を意味しているという仮定から、今度は逆に「息子」のかわりに「の」をおいてみよう。

(三・十九)



(三・十九) から (三・二〇) のようになる。

(三・二〇) 「の」本を読んでいる」の」

(三・二一) 父は本を読んでいるのをじっと見ていた。

ここまでの分析に異議を唱えようとすれば、(三・十四) (三・十九) に対してであろう。

「私が「の」を買った」、「の」が本を読んでいる」という文は (三・十六) の「息子が本を読んでいる」にくらべ、日常使われている文からはかけ離れすぎている。この事実をうまく説明してくれるのが、Okutsu (1974) の、「の」はすべての名詞を含み得るような最も意味の広い名詞であるという論である。

従来、日本文法の中では、「こと」「の」が形式名詞として他の名詞から区別されてきたが、Okutsu はその必要性を認めない。形式名詞の分類の指標は、「その意味の抽象性の故に、常に何らかの修飾語を伴う非自立的な語である」という点にあるが、「物」「時」「所」のような代表的な形式名詞でも単独に使われる場合が多いということ (例文 (三・二二))、そして、名詞の意味の抽象性<sup>(19)</sup> というものは或る一ヶ所で切断してすべての名詞を二分することはできないような連続性のあるものだ、と理由をあげている (例：(三・二二))。

(三・二二)<sup>(20)</sup> a. 物は大切にしなければならない。

b. 時と所によって柔軟な態度をとればよい。

c. 所をかえて飲みなおそう。

(三・二三) 奥津↓日本人↓人↓動物↓生物↓存在

(三・二三) によれば「存在」は高次の抽象性を持つはずだが、普通、形式名詞に入れられてない。Okutsu のいうように、実際同じ名詞が、(三・二二)や「事を起こす」のように単独で使われ、ま

たある時は、「思うままに行動するものではない」「山に登るときは注意すること」のように修飾語を必要として使われるというのは、固定化した形式名詞と非形式名詞との区別が、無意味であることの証拠である。ゆえに、次のように「こと」「事実」「件」「さま」「景色」「気配」「気持」は、その抽象度に差はあれ、同じ名詞という範疇で考えるのである。

(三・二四) a. ぼくが始めたことを見せてあげよう。

b. 君が知ってる事実を全部話してごらん。

c. 課長が辞職した件については、まだ何も語られていない。

d. さなぎが蝶になるさまを録画している。

e. 太陽が地平線に落ちていく景色をずっと眺めている。

f. 恋人が悲しんでいる気配はない。

g. 罪を背負っている気持は死ぬまで消えないだろう。

例えば、(三・二四) aで、ぼくが始めたのは切手コレクションだとしよう。

(三・二五) a ぼくが始めた

a	ぼくが始めた	切手コレクション
b		
c	趣味	
d (   (三・二四) a)	こと	

(を見せてあげよう)

(三・二六) a ぼくが切手コレクションを

a	ぼくが切手コレクションを
b	収集
c	趣味
d	こと

始めた。

「こと」はより抽象的名詞だというだけのことである。これと同様に「私が「の」を買った」も考えるのである。「の」は赤いサイクリング車かもしれない。

(三・二七) 私が赤いサイクリング車

の	物	乗る物	自転車
---	---	-----	-----

買った。

ただし「の」は「こと」よりも更に抽象的な意味の語であるから、もはや「の」一般について述べる用言は存在しない。文中で用いられる場合は必ず限定される。その「の」が、物であるか、人であるか、事であるか、更にはどんな物、どんな人、どんな事であるか、などを明示しなければならぬ。だから、「の」は、少なくとも表層文においては常に何かの修飾を必要とする、と考えられる。<sup>(21)</sup>

以上の説明で、日常使われる文とかけ離れている「私が「の」を買った」などの文は、表層文としては許されないにしても、深層構造においては認められる、ということを確認にした。

そこで、(三・二)の分析にもどろう。(三・二)では、同一名

詞連体修飾構造であるのに、同一名詞消去変形がかからないことに問題があった。

(三・二八)「〔息子<sub>i</sub>が本を読んでいる〕の」

これは、どのように分析したらよいだろうか。私は、同一名詞消去変形、同一とは何か、ということが鍵だと思う。

Okutsu のたてた同一名詞消去変形は名詞同一の条件によって、連体修飾文中の被修飾名詞と同一の名詞に適用し、表層構造へと転化させる。

(三・二九)同一名詞消去変形 (必須)<sup>(22)</sup>

$[[X\ NP_1\ C\ Y]\ Sobj\ NP_2] \Rightarrow$

$[[X\ Y]\ Sobj\ NP_2]$  但し  $NP_1 = NP_2$

「息子」と「の」が同一名詞でないために消去できないのならば、そもそも同一名詞連体修飾構造を生成するのに必要な、名詞同一の条件も満たしていないはずである。Okutsu は、この名詞同一の条件は、被修飾名詞と連体修飾文中の名詞とが単に同じ音形であればいいというのではなく、それが指示する実体が同一の対象を示すものでなければならぬ、と述べている。<sup>(24)</sup>

名詞句の同一性が音形の同一性でないとすると、*i* のような下付き記号 (subscript) で同一指示性を表わすことになる。

(三・三〇)「〔息子<sub>i</sub>が本を読んでいる〕の<sub>i</sub>」

しかし、(三・三〇)は次に引用する Kajita (1974) の統語規則 (特に削除変形) における同一性の概念の定義で、(150)(i) を満たせず、同一名詞消去変形は適用されない。

『いま、深層構造 P に任意数の変形が適用され、或る削除変形 T

が適用される直前の段階で派生句構造 P' を持つに至ったものとしてよう。その場合、P' に含まれている二つの要素 X、Y が T の P' への適用において同一であると思倣されるためには、X、Y は下記 (150) の諸点に関して同じでなければならない。

(150)(i) 終端記号連鎖

(i) 指示

(ii) P' における句構造

(iii) P において両者にそれぞれ対応 (correspond) する要素<sup>(25)</sup>』

さて、そうすると、同一条件を満たせず (三・二九) の変形を受けなかった (三・三〇) の語彙挿入 (lexical insertion) の段階での名詞の同一性はどうなるのだろうか。やはり、次の (三・三一) の例を阻止するためにも、音形の同一性、終端記号連鎖の同一性は要求されなければならない。

(三・三一) 父は  $\{ \{ \text{〔息子}_i \text{が本を読んでいる〕人}_i \} \text{を} \}$   $\{ \{ \text{〔息子}_i \text{が本を読んでいる〕ジョン}_i \} \}$  をじっと見ていた。

しかし、事実 (三・三〇) は同一名詞消去変形を受けることなく、しかも同一名詞連体修飾構造として表層化している。そこで「の」を被修飾名詞とする同一名詞連体修飾構造に私は次のような提案をしたい。

まず、語彙挿入の段階で名詞同一の条件を満たす (三・三二) がある。

(三・三二)「〔息子<sub>i</sub>が本を読んでいる〕息子<sub>i</sub>」

これに随意変形として、同一名詞連体修飾の被修飾名詞を、最高次の抽象度を持つ「の」におきかえる変形(三・三三)が適用されたと考えるのである。

(三・三三) 被修飾同一名詞「の」化規則

(随意)  $[[X\ NP_1\ C\ Y]S_{obj}\ NP_2]NP \Rightarrow_{op}$

$[[X\ NP_1\ C\ Y]S_{obj}\ の]NP \text{ 但し}$

$NP_1 = NP_2$

これは随意変形であるから、適用されなかった場合は同じく構造記述を満たしている(三・二九)の同一名詞消去変形の適用を受け、(三・十七)のようになり、正しい文を生成する。

ここでわかるように、この二つの変形規則が一方を義務規則、一方を随意規則としながらも、適用順序があるということである。(三・二九)の規則がその義務性から優先的に適用されてしまうと、永久にその文には(三・三三)の規則を適用することができなくなる。ゆえに、先に随意規則である(三・三三)が適用されるものとする。これで、(三・一)～(三・四)の問題については終る。

第三章のテーマは「こと」「の」の違いであるが、その選択が主文の述語によってのみ決まるものではないことは前にも述べた。そこで、「こと」「の」にそれぞれ意味素性を与えて、述語との共起の可能性を説明しようとしたのが、Kuno (1973) である。「の」が「具体的なできごと」「こと」が「抽象的、または一般的なできごと」を表すとしている。また、その考えを発展させて Josephus (1976) では、「の」に「直接」、(26)「こと」に「間接」という意味素性を与えている。

しかし問題は、「抽象」と「具体」、あるいは「直接」と「間接」の間が断続的なものかどうかということである。Inoue (1976) は説明できないものとして、次のような例をあげている。(26)

(三・三四) a. 誰かが部屋に入ってきたことに気づいた。

b.  $\left\{ \begin{array}{l} \text{こと} \\ \text{の} \end{array} \right\}$

(三・三五) a. 彼らは幸福が訪れることを期待した。

b.  $\left\{ \begin{array}{l} \text{こと} \\ \text{の} \end{array} \right\}$

(三・三六) a. 道子はこの手紙を出すことを忘れていた。

b.  $\left\{ \begin{array}{l} \text{こと} \\ \text{の} \end{array} \right\}$

Inoue は、これらの例では「こと」「の」の意味の差はないといっているが、私には、aの方がbより客観的に補文の内容をとらえているように(間接)、またはbの方がaより描写的な表現、具体的、体験的なイメージのように(直接)感じられる。(三・三六)で、aは、手紙を出さなければいけないという概念、考え自体を忘れてしまった感じなのに対し、bは、道子がポストの前を通ったのにポストの口に手紙を入れ忘れた、というような、具体的行為を忘れた、という感じを受ける。実際、日常会話で次のように使っている。

(三・三七) 「あっ、手紙を出すの忘れちゃった!」

これに対して次のように言うことはまず、ない。

(三・三八) \*「あっ、手紙を出すこと忘れちゃった!」

ところが、いくらこのような意味の差を感じたとしても、それがどう定式化されるかは解決されてはいない。もう少し、はっきり見ることのできる統語的な差というものが、ないだろうか。次に、補

Kuno(1973)は「コト」「ノ」と「ト」についての章で、「コト／ノ」で終わる名詞節は、その節が表わす動作、状態、出来事が真であるという話者の前提を含んでいるが、「ト」で終る名詞節には、そのような前提が含まれていない、と述べている。次の例のように、主題節の表わす命題が真であるという前提(Presupposition)<sup>(27)</sup>を含んでいない述部に対しては「コト／ノ」は用いられないものである。<sup>(28)</sup>

(三・三九) 太郎が花子をなぐった { \*こと / \* の } はうそ  
  { ということ / というの }<sup>(27)</sup>

だ。

しかし、この仮説に対し、反例があがっている。

Sagawa(1981)では、「こと」「の」のついた補文の主語と、主文の主語の間でおくる同一名詞削除変形(Equi)に、Equi I と Equi II の種類があることを仮定し、Equi I を次のように規定している。

(三・四〇) Equi I は「の」や「を」のついた〔「の」や「を」と〕に mark された<sup>(29)</sup>補文の主語に義務的に適用する。ただし、その補文は叙実性(factivity)の欠けたものに限る。

そして次の(三・四三)のように、再帰化の適用を受けて補文の主語が表層文にあらわれると非文法的文を生成してしまうのを、Equi I の義務性に裏付け、(三・四五)～(三・四八)で、Equi I と II の叙実性の違いを検証している。

(三・四一) 花子はその本を読むのを忘れていた。 [Equi I]

しかし、この仮説に対し、反例があがっている。

Sagawa(1981)では、「こと」「の」のついた補文の主語と、主文の主語の間でおける同一名詞削除変形(Equi)に、Equi I と Equi II の種類があることを仮定し、Equi I を次のように規定している。

(三・四〇) *Equi I* は「の」や「こと」のついた「*の*」や「*こと*」に *mark* された、補文の主語に義務的に適用する。ただし、その補文は叙実性 (factivity) <sup>(29)</sup> の欠けたものに限る。

そして次の(三・四三)のように、再帰化の適用を受けて補文の主語が表層文にあらわれると非文法的文を生成してしまうのを、Equi I の義務性に裏付け、(三・四五)～(三・四八)で、Equi I と II の叙実性の違いを検証している。

(三・四一) 花子はその本を読むのを忘れていた。  
[Equi I]

(三・四二) 花子はその本を読んだことを忘れていた。[Equi II]  
 (三・四三)\*花子は自分がその本を読むのを忘れた。[Equi I]  
 (三・四四) 花子は自分がその本を読んだことを忘れていた。

(三・四五) 花子は本を読むのを忘れたか？  
[Equi I]  
[Equi II]

(花子が本を読んでいないということも考えられる)

(三・四六) 花子は本を読んだことを忘れていたか？ [Equi II]

(補文の内容は不変)

(三・四七) 花子は本を読むのを忘れたかった。  
[Eqn 1]

《この場合は本を読んだことになるが、（三・四一）では、読んでいない。補文の内容が、主文の動詞の否定辞の有無によって、変わってしまったている》

(三・四八) 花子は本を読んだことを忘れていなかった。

[Equi II]

(補文の内容は不変)

「こと」「の」のついた補文にも叙実性 (factivity) の欠けたものがあるということは証明、しかし、(三・四〇)で次のような例はどのように処理されるだろうか。

(三・四九) 花子は皆に一月十日の新年会を呼びかけた。なのに、花子は自分がその新年会に行くのを忘れた。

(三・五〇) 皆に新年会を呼びかけたのは花子だった。だから、花子は自分がその集会に行くのを忘れなかった。

(三・四九)と(三・五〇)で補文の内容が変わるのにもかかわらず、再帰化を受けた補文の主語があらわれている。



Equi I は義務規則とされているが、再帰化もまた義務規則である<sup>(30)</sup>。Equi I が先に適用されれば、構造記述として求められている同一性は、前述の(150)削除変形における同一性の条件に反しないかもしれない。しかし、再帰化変形が先に適用された場合、同一性の条件としての(150) i...終端記号連鎖は、「花子」「自分」というように違ってしまうが、削除変形は適用できるのだろうか。いや、私は、(150)に一般性を持たせる。再帰化が適用された名詞には Equi はかからない。

名詞を再帰代名詞にするというのは、表層で同じ言葉を繰り返すのを避ける為だと考えられる。いわば、削除される運命にある同一終端記号連鎖を「表層化」してやれる規則なのである。だから、もし再帰化が適用されたあとで、その適用を受けた名詞を削除しうるとすると、再帰化は規則としての *status* を失ってしまうのである。

深層構造として、補文が [-factivity]<sup>(31)</sup> である (三・五一) と、 [+factivity] である (三・五二) がある。ゆえに (三・五一) は Equi I' (三・五二) は Equi II とみなされる。

(三・五一) 花子「は花子」がその本を読むのを忘れた。

(三・五二) 花子「は花子」がその本を読んだことを忘れていた。

(三・五二) では Equi II が適用された場合 (三・四二) となり、適用されなければ再帰化が義務的に適用され (三・四四) が生成される。(三・五一) では、Equi I が適用された場合は (三・四一) になり、再帰化が適用されれば (三・四九) (三・五〇) に出てくるような文が生成される。

しかし、(三・四三) が非文であり、(三・四九) (三・五〇) の「自分が」が強調、対比のような使われ方をしていること、——いわば、特殊な環境にしか現れないことは事実である。この特殊な事例を除けば、Equi → 再帰化という適用順序を認めた方が都合がよい。Equi I が義務的に適用されれば、再帰化は構造記述がみたされず、(三・四三) のような例が説明できるからである。(三・四九) (三・五〇) のように、Equi I の適用可能性のあった構造が再帰化をうけている場合は、文脈 (context) が限られている。つまり、その要因が「文」 (sentence) の単位を越えたところにあるわけである。だからこの場合の再帰化は、現在一般的に考えられている構造記述の範囲よりも大きな単位で考えられるべきであるかもしれない。再帰化がある状況で随意的に、Equi I がかかるべき構造に割り込んでくるとするならば、それは随意的なものである故に、談話の文法 (discourse grammar) に含まれると考えるべきである<sup>(32)</sup>。

ところで、以上見てきた中でわかるように「こと」「の」の差は叙述性によって表わすことはできない。しかし、次の例でわかるように「こと」「の」の差は明らかに存在する。

(三・五三) a フランス語で話す{こと}は難しい。

b

{こと}

(三・五四) a 私はたばこをすう{こと}をやめた。

b

{こと}

(三・五三) a では一般論として述べられているようだが、(三・五三) b では、話者にとって「難しい」といっているように感じら

れる。実際、次のように差が見られる。

(三・五五) ぼくにとって、フランス語で話す \*こと  
の は難しい。

(三・五六) ジョンにとって、フランス語で話す こと  
の は難しい。

(三・五六) のような例では、話者がジョンの気持ちになつて話しているかそうでないか(共感[Empathy]があるかないか)によつて、共感があれば「の」、なければ「こと」が選択されるのではないかと思う。(三・五四) aでは、ある時以後禁煙しているように感じられるのに対し、(三・五四) bでは、その時だけやめたような感じを受ける。

これらの違いは、前述した「こと」「の」の意味の違いによるものであるかもしれないが、これまで見てきたように、「こと」「の」は補文の内容と主文の述語と両方に関係しているので、単純に決まるものではない。事実、人により「こと」「の」の使いわけが違つたり、「こと」でも「の」でもよい、という例もある。

「こと」「の」の違いではっきりしているのは、「こと」が何の修飾語も受けずに単独でも使われうるのに対し、「の」が不可能であるということである。

### おわりに

以上、「こと」「の」を変形生成文法の立場から分析してきたが、その分析で問題となつたのは、大きくいって、

#### ・選択制限

#### ・同一性の条件

の、二つである。

この二つは、深層構造とは何か、という問題に密接に関わっている。「選択制限は深層構造においてのみ認められるものである」のか? 「同一指示性の決定は意味部門において行なわれる」のか?

『変形文法では深層構造も表層構造も統語の表示のレベルを構成するものであり、従来は深層構造が意味部門への入力と考えられていたが、チョムスキー(70年)以降、表層構造の情報によって決定される意味現象が明らかにされ、表層構造と深層構造の双方が意味部門への入力と考えられるようになった』<sup>(33)</sup> ということだが、はっきりいって、現在の統語法の問題は、意味部門と統語部門の接点となる部分で起こっているといつてよい。

意味部門と統語部門は分けて考えた方が、理論的にはすっきりする。名詞は、その個別の意味素性(semantic feature)に関わらず、Nという統語素性(syntactic feature)で扱つ、格助詞のようにそれ自体意味を持たないものは、統語部門のみで扱われるとする。しかし、問題は動詞であり(述語)、これはVという(Pred.)統語素性のみで一様に扱ってしまうわけにはいかない。動詞(述語)の意味によつて、統語法・最重要の格助詞配置が決まる、といつてよいからである。そして、その動詞の意味と名詞の意味に関わつて、統語を行なうのが、「こと」「の」なのである。

選択制限ということについては、文学的表現、詩的表現を否定しているかのように思われるかもしれないが、逆にいえば、決まりきつた、あたりまえの表現というものが存在するからこそ、その規則

を破った、文学的表現、あるいは詩的な暗喩表現が成り立つのである。だから、同じ選択制限といっても次の例文の(i)と(ii)は違う。

- (i) 星が夢を見る。
- (ii) \*夢が星を見る。

(i)は、ふつう選択制限で「見る」は主語に「+Human」を要求する)排除されるところだが、暗喩としては許される。しかし、(ii)は暗喩としても許されない。「夢」は「見る」という動詞の主語には、なれないのである。

このような選択制限の違い、動詞(述語)の分類などに、意味部門と統語部門の関係の問題は、ゆだねられているのかもしれない。いずれ、この問題が明確に解決されることを願って、本論文をここに閉じたい。(一九八三年卒)

# 〔注〕

- (1) 次のような例の場合、「会社」は人間の集合体として「+Human」の素性を与えられている、と考える。  
「会社が大型のコンピュータを買った。」
- (2) Inoue(1978) (p. 64) からの引用
- (3) Inoue(1976) (上: p. 46) にある例文とその Phrase marker
- (4) Inoue(1976) (上: p. 251~252) による。
- (5) Inoue(1976) (上: p. 262) による。
- (6) Inoue(1976) (上: p. 100. N. B.) による。
- (7) Okutsu(1974) (p. 102)
- (8) Okutsu はこの場合の連体修飾文を Comp(補足句)と呼ぶ。
- (9) Okutsu(1974) (p. 316) にあがっている例文。

- (10) Okutsu の図では、量規定詞「**コト**」がついている。Sobi 中の「**コト**」は或る特定の「**コト**」であるからである。ここでは議論をすすめる上で直接関係しないので省いた。

- (11) 『ただし、次のような例文は違う構造である。

a. 彼が買ったトイウ山水画ハ本物デハナイヨウダ

これは次のように「誰カガート言ウ」引用構造から生成された連体修飾構造である。

b. 彼が買った誰カ(君、彼、etc.)が言ウ山水画……』

Okutsu(1974) (p. 321)

- (12) Okutsu(1974) (p. 87) にある例文
  - (13) Okutsu(1974) (p. 324) にある例文
  - (14) Okutsu(1974) (p. 325) にある例文
  - (15) Okutsu(1974) (p. 54) にある例文
  - (16) Okutsu(1974) (p. 45) にある例文
  - (17) Inoue(1976) 上: 「**Q**」「**こ**」「**こと**」「**事実**」の節による。
  - (18) これらの語については、Inoue(1976) 上: (p. 252) に書かれている。(Karttunen 1970. a. 1970 b.) による述語の分類である。
- 叙実述語 (factive predicate) は補文が表わしている命題が真であるという前提を持つ。この前提は主文が否定文や疑問文になっても変わらない。含意述語 (implicative predicate) は主文が肯定の時に補文が真であることを前提とし、主文が否定の時に補文が偽であることを前提とする。
- (19) Okutsu(1974) (p. 205) による。

- (20) Okutsu(1974) (p. 204) における例文
- (21) Okutsu(1974) (p. 358) による。Okutsu は、「の」以上の抽象性、一般性を持つ語はないとし、もし形式名詞なるものをたてるとしたら、この意味で「の」が最もふさわしい、といっている。
- (22) Okutsu(1974) (p. 107) における。
- (23) C=格助詞
- (24) Okutsu(1974) (p. 97~98)
- (25) Kajita(1974) (p. 258)
- (26) Inoue(1976) (p. 263) による。
- (27) 『これを「焦点」に対する意味での「前提」と区別するために内在的前提(inherent presupposition, Jackendoff, 1972. 276f)と呼ぶことがある。補文の命題が真であるという内在的前提を伴う述語を叙述的述語、そのような前提を伴わない述語を非叙述的述語と呼ぶ(Kiparsky and Kiparsky, 1970)』——Kajita (1974) (p. 615) による
- (28) Kuno(1973) (p. 139) における例文
- (29) その命題が真であるという前提があること。
- (30) Shibatani(1978) (p. 44) には、再帰代名詞化規則の義務性について書かれている。
- (31) 叙実性のある、なしを+、-とし、素性であらわした。
- (32) Sagawa(1981) bでは次のような定義をしている。
- “If a given rule is obligatory, the rule belongs to SG (Sentence grammar).”

また、Sagawa(1981) aには、「Equi I は SG (文文法) の規則であり、Equi II は、DG (談話文法) の規則とも考えられる」ということが書かれている。

- (33) Haraguchi(1980) 「チョムスキー理論小辞典」——表層構造と深層構造——の説明による。

#### 【引用文献】

- 井上和子、1976 「変形文法と日本語(上)」、大修館
- 、1978 「日本語の文法規則」、大修館
- 奥津敬一郎、1974 「生成日本文法論」、大修館
- 梶田優、1974 「英語学大系4・文法論II」、大修館
- 久野暁、1973 「日本文法研究」、大修館
- Sagawa, Masayoshi, 1981. a, “Two kinds of Equi in Japanese” Descriptive and Applied Linguistics 14, International Christian University,
- 、1981. b, “On some formal properties of sentence grammatical rules” Descriptive and Applied Linguistics 15, International Christian University.
- 柴谷方良、1978 「日本語の分析」、大修館
- Jackendoff, R.S, 1977, “Constraints on Phrase Structure Rules” (‘Constraints’), in Culicover et al.(eds.) Formal Syntax, pp. 249-83
- 原口庄輔、1980 『チョムスキー理論小辞典』「言語」11月号、(1980, Vol. 9, No. 11) 大修館、p. 52-61.